隣は里山 遊びながら学ぶ

こどもの未来へ 学びやの挑戦

東京ゆりかご幼稚園

大人でも足を滑らせそうな森の坂道を、すごい勢いで園児たちが駆け下りてくる。「足ブレーキだよ、足ブレーキ」。注意をうながす先生の隣を、女の子も男の子も笑顔いっぱいで走り抜けていく。

「だんだん転ばなくなってきましたね」。理事長兼園長の内野彰裕さん(48)が目を細める。「経験から学んでいくんです。移転前だったら転ぶ前に手を差しのべていたかもしれない」

畑で収穫 給食に

東京ゆりかご幼稚園は八王子市の新興住宅地「みなみ野シティ」を見下ろす高台にある。市内の館ケ丘団地から移転したのは2年半前。驚くのは園庭の広さだ。移転前の9倍、約2・2㌶もある。

しかも隣に40㌶を超す里山が広がる。都が指定した「七国・相原特別緑地保全地区」だ。森にキツネやフクロウ、ノウサギなどの野生動物がすみ、夜な夜な園庭に遊びにやってくる。

豊かな自然のなかで園児はのびのび遊ぶ。池でオタマジャクシやドジョウを見つけ、芝生でバッタやトンボを追う。大きなヘビが小鳥に食らいつき、丸のみする場面に出くわすことも。

春に種もみをまき、棚田を起こし、夏には雑草を抜く。そして、秋には収穫だ。稲穂を干し、昔の機械で脱穀し、棒で突いて精米。かまどで炊いておにぎりにして食べる。畑ではトマトやニンジン、レタスなど十数種類を季節ごとに育て、採れた野菜は給食に。小麦は石臼でひき、うどんやパンになる。農作業を子どもたちが経験する。

長女が年長組に通う会社員福田晃仁さん(40)は「手入れされた里山の中で、子どもたちが様々なことを経験できる。毎日が行事みたい」と言う。

自然の中で遊ぶ子どもたち。広い園庭の向こうに細長い園舎が見える＝八王子市七国３丁目

自然を求め移転

内野さんが両親のつくった幼稚園を継いだのは1992年。大学卒業後、まもなくだった。母、父が相次いで他界し、園児数が激減したどん底の時期。28歳の時、幼児教育の経験豊富な現副園長の麻里さん(48)と結婚し、ようやく再建が軌道に乗った。

移転前も緑豊かな園庭は定評があったが、物足りなさもあった。「もっと日常的に自然とふれあえないか」。少年時代を過ごした清瀬市の森林や田園が広がる風景が頭にあった。見つけた場所が都市再生機構が開発した事業用地。交渉の末、5年前に手に入れた。

旧知の建築家と相談を重ね、全長100㍍の木造平屋建ての園舎を建設。園舎は、園庭の子どもを冬の強い北風から守る防風林代わりになる。荒れ野に芝生や樹木を植え、沼地は元々の自然を再現する池や小川のビオトープを設けた。遊具もほとんどが手作り。園児の父母たちが参加し、一緒につくり上げた。

今も月1回、有志らによる「鉄腕クラブ」が活動する。森の近くにツリーテラスを建てたり、小川に橋を架けたり。年長組の娘がいる伊原潤子さん(44)は「お父さんたちが作ったものだと子どもたちも安心感がある」と話す。

内野さんは「園庭、園舎をつくったら終わりではなく、毎年新たな何かを加えたい」。理想の里山教育を追い求める。（武井宏之）

私の理想図

子どもの「生きる力」育む

内野彰裕園長

里山は自然と人がかかわりながら環境が保たれている。日本の文化に根ざしており、特別な教材がなくても、子どもが「生きる力」を育むのに必要なものが備わっている。この環境を生かした幼児教育の質を高め、子どもたちの持つ無限の可能性を引き出したい。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。